2023 年度事業報告

Ⅰ．一般概況

１．植物性たん白の生産、出荷・自社使用量

当協会の調査によれば、2023 年の植物性たん白の国内生産量は 48,128 トン（うち、大豆系が 42,509 トン、小麦系が 5,619 トン）で、対前年比 98.7％であった。

また、同年の植物性たん白の出荷・自社使用量は 60,896 トンで、対前年比 100.9％であった。

表－１　植物性たん白の生産、出荷・自社使用量の推移

単位：トン、％

年次	国内生産量			出荷・自社使用量		
	計	大豆たん白	小麦たん白	計	大豆たん白	小麦たん白
2019年	47,107	40,949	6,158	61,794	40,876	20,918
2020	49,993	44,198	5,795	61,647	42,424	19,223
2021	50,503	44,725	5,778	64,512	45,000	19,512
2022	48,761	43,015	5,745	60,373	42,025	18,348
2023	48,128	42,509	5,619	60,896	43,846	17,050
（対前年比）	98.7	98.8	97.8	100.9	104.3	92.9

資料：　(一社)日本植物蛋白食品協会調べ

注：
1.「国内生産量」は国内自社工場で生産した総量でOEMや受託生産も含む。海外自社工場の生産量は含まない。
2.「出荷量」は国内向けに出荷したものだけでなく輸出したものも含む。「自社使用量」は最終製品製造のために自社で使用する原料の量である。
3. 四捨五入の関係で、計と内訳が一致しない場合がある。

２．植物性たん白の JAS 格付検査依頼数量

（一財）日本穀物検定協会の取りまとめによれば、2023 年の植物性たん白の JAS 格付依頼数量は 27,533 トン（うち、乾燥品が 27,093 トン、ペースト状が 440 トン）で、対前年比 101.4％であった。

表－２　植物性たん白の格付検査依頼数量の推移

単位：トン、％

年次	計	乾燥品			ペースト状	冷凍品
		計	粉末状	粒状		
2019年	28,937	28,123	5,665	22,459	715	99
2020	28,193	27,730	4,879	22,851	464	0
2021	27,275	26,837	4,052	22,786	438	0
2022	27,152	26,706	3,208	23,498	446	0
2023	27,533	27,093	3,093	24,000	440	0
（対前年比）	101.4	101.4	96.4	102.1	98.7	―

資料：　（一財）日本穀物検定協会資料

注：　四捨五入の関係で、計と内訳が一致しない場合がある。

３．植物性たん白の輸入量

財務省「貿易統計」によれば、2023 年の植物性たん白の輸入量は 52,764 トン（うち、大豆系が 30,830 トン、小麦系が 21,934 トン）で対前年比 92.1％であった。

表－３　植物性たん白の輸入量の推移

単位：トン、％

年次	計	小麦たん白	大豆たん白		
			計	たん白含有率90％未満	たん白含有率90％以上
2019年	47,977	19,877	28,100	7,848	20,252
2020	49,640	20,690	28,950	7,828	21,123
2021	55,023	22,268	32,756	8,432	24,323
2022	57,316	22,277	35,039	10,754	24,285
2023	52,764	21,934	30,830	9,220	21,610
（対前年比）	92.1	98.5	88.0	85.7	89.0

資料：財務省「貿易統計」

注：1．各区分の現在の品目分類番号は以下のとおりである。

(1)小麦たん白：1109.00-000

(2)大豆たん白（たん白含有率90％未満）

(2)-①たん白含有率80％以上、小売容器入り：2106.10-221

(2)-②その他：2106.10-222

(3)大豆たん白（たん白含有率90％以上）：3504.00-021

2．1の(2)及び(3)の一部には、大豆たん白以外の植物由来たん白が含まれていると考えられる。

3．四捨五入の関係で、計と内訳が一致しない場合がある。

Ⅱ．各種事業等の実施状況

１．植物性たん白の消費の増進、普及啓発に関する事業（調査、資料収集、展示会）

（１）パンフレット等の作成・更新

植物性たん白の統計データを定期的に更新するとともに、対外的なプレゼンテーション資料（(株)食品化学新聞社主催の ifia JAPAN 2023 用、(一財) 日本穀物検定協会主催の JAS 品質管理責任者講習会用）を整備・更新した。

（２）試供品等の配布

ifia JAPAN 2023、(公社) 全国学校栄養士協議会の定時総会、日本スポーツ栄養学会第９回大会への協賛・出展を通じ、植物性たん白の試供品、パンフレット、レシピ集等の配布を行った。

（３）広報

食品関係の業界紙誌記者を対象に、通常総会終了後の記者会見を実施するとともに、関係各紙誌に協会広告及び会長年頭所感を掲載した。また、報道・調査機関からの取材調査等に対応した。

協会ホームページについては、各種統計データ、協会活動情報等の更新・見直しを行うとともに、会員専用ページにあったパンフレットやレシピ集を一般の方が閲覧できる「植物性たん白について」のページに移し、パンフレット類のダウンロードも可能にした。

食品関係事業者、一般消費者等からの各種問合せに対応した。

（４）外部主催の事業・催し等への参画

ifia JAPAN 2023 及び日本スポーツ栄養学会第９回大会へ協賛・出展した。

(公社) 全国学校栄養士協議会の定時総会、農林水産省ほか主催の「第 18 回食育推進全国大会 in 富山」において、植物性たん白の PR を行った。

農林水産省及び（公財）日本農林漁業振興会主催の農林水産祭・実りのフェスティバルに協賛、(公財) 不二たん白質研究振興財団主催の講演会「大豆のはたらき in 大阪」を後援・参加した。

２．植物性たん白食品の規格及び技術に関する事業（調査、資料収集）

（１）JAS 等

植物性たん白 JAS 改正に向けた少人数会合（FAMIC（(独法) 農林水産消費安全技術センター)、(一財) 日本穀物検定協会、会員企業のうち昭和産業㈱、日清オイリオグループ㈱、不二製油㈱の技術部会委員、及び協会事務局）を計４回実施し、JAS の植物たん白質含有率の試験方法について、必要な調査、手続きを進めた。

(一社)日本農林規格協会の連絡協議会等に出席し、JAS とその運用に関する情報収集、意見交換等を行った。

(一財) 日本穀物検定協会主催の JAS 品質管理責任者講習会に出席し、「植物性たん白とその品質管理について」の講義を行った。また、同協会の JAS 公平性委員会に業界団体として出席した。

農林水産省のフードテック官民協議会への出席等を通じて、関連情報の収集を行った。

（２）技術の開発・改善

技術部会において技術研修会（10.24～25）を実施した。味の素㈱九州工場、佐賀大学、福岡県工業技術センター生物食品研究所を訪問し、意見交換。特に、佐賀大学においては、CO2 を活用した大豆育成プロジェクト現場を視察した。

インフォーママーケッツ ジャパン㈱主催の食品開発展 2023 に出席した。加えて、農業・食品産業技術総合研究機構の研究成果展示会 2023 にオンライン参加した。

３．植物性たん白食品の内外の情報収集及び調査研究に関する事業（調査、資料収集）

（１）情報収集

植物性たん白及び関連食品の原料、加工、利用等に関する内外の情報収集を行うとともに、植物性たん白の生産出荷統計、JAS 格付検査依頼実績及び輸入実績のデータを整備した。

また、食品の安全・安心への関心の高まり、規格・表示の拡充、国際化等に的確に対応するため、行政機関等の情報を含めて、正確かつ速やかな収集・提供に努めた。

この一環で、(一財) 食品産業センターの企業・団体連絡協議会等に出席し、食品産業政策に関する農林水産省からの説明、食品産業をめぐる諸問題に関する同センターからの説明等を通じて、関連情報の収集を行った。また、(一社) 日本農林規格協会のセミナーへの出席等を通じて、関連情報の収集を行った。

国際的な情報については、アメリカ大豆輸出協会主催の米国大豆バイヤーズ・アウトルック会議 2023、カナダ大豆協会主催のカナダ大豆セミナー及びネットワーキングレセプションに参加し、植物性たん白の需要・原料事情に関する情報収集を行った。

（２）調査研究

九州女子大学への研究委託契約（題目：高齢者の健康寿命延伸に対する植物性たん白摂取による栄養面での効果）が、コロナ期間中に終了していたため、新たな方向を検討し、次年度に植物たんぱくを利用したレシピ集を編集することとした。

（３）現地研究会

運営委員会において、現地研究会（2024.2.21～24）を台湾で実施した。現地の日本法人を中心に見学、意見交換した。南部ではカゴメ、キッコーマンの現地法人、中部では中一食品（昭和産業㈱)、台北では統一企業を訪問した。

４．セミナーの開催（研修、セミナー）

協会役職員、会員企業職員、報道関係者等を対象とした技術セミナー（2024.1.23）を開催し、東京家政大学栄養学部 鍋谷浩志教授が「日本食の特徴とその文化 -日本食における植物タンパク質の役割から人類の持続的発展を考える-」、農研機構 南條洋平上級研究員が「農研機構が育成した大豆品種について -生産性を向上させる品種と子実成分に特徴のある品種-」をご講演。

５．その他

（１）協会運営

関係法令、定款等に則り、各種内部会議等を円滑かつ的確に開催・実施した。具体的には、運営委員会を５回開催、監事監査を２回実施、正副会長会議及び理事会・通常総会合同会議を開催、技術部会を３回開催した。

また、協会創立 50 周年記念事業の準備を開始した。現運営委員長（日清オイリオグループ㈱)、次期運営委員長（昭和産業㈱）及び協会からなる「50 周年準備会合」を立ち上げ、準備を進めた。第１回準備会合を８月に開催し、40 周年記念懇親会の式次第、予算、取進め方などをレビューした。第２回準備会合を 2024 年１月に開催し、準備状況を確認した。加えて、50 周年記念誌についても執筆作業を開始した。

（２）その他

会員（賛助会員を含む）に対して、国内外の行政機関、企業、団体、研究機関等の動向や関係省庁からの通知文書等について、速やかに伝達した。